

Title	新しいイノベーションを目指したビジネス・マッチングによる「つくばイノベーション研究」の展開
Author(s)	松岡, 東香; 石田, 賢; 久保田, 時治; 氷鮑, 揚四郎; 山崎, 宏之; 木下, 知己
Citation	年次学術大会講演要旨集, 23: 807-810
Issue Date	2008-10-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/7685
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨



2 D 1 7

新しいイノベーションを目指したビジネス・マッチングによる 「つくばイノベーション研究」の展開*

○ 松岡 東香（筑波学院大学）、石田 賢（日本サムスン株式会社、韓国漢陽大学校大学院）、
久保田 時治（株式会社常陽産業研究所）、氷鮑 揚四郎（筑波大学）、
山崎 宏之（独立行政法人産業技術総合研究所）、木下 知己（筑波学院大学）

1. はじめに

今日の競争環境の激化は、研究開発に投じる資金・人材・技術等の経営リソースの多岐化・複雑化をもたらし、単に一組織の持つ技術を総動員した技術集約的な解決は困難になり、オープンイノベーション[1]~[3]への取り組みが、重要な経営課題になっている。

既存の人的ネットワークだけでは解決できない、リソース的に手が回らない技術課題・経営課題に対して、従来の人的ネットワークを超えるオープンなコミュニティを形成し、特に人的巡り合わせによる「ビジネス・マッチング」を主眼とした、地域イノベーション創出をも目指した、コミュニティとして「つくばイノベーション研究（www.tsukuba-society.org）」を立ち上げた。

一応、構成メンバーは産学官のそれぞれの背景を有するものではあるが、それぞれの組織としての関与では無く、志だけで緩く繋がっているにもかかわらず、それなりの実効的な成果も出てきており、産学官連携活動をベースとした地域イノベーション推進の活動事例の一つとして得られた知見を報告する。

2. 「つくばイノベーション研究」とは

「つくばイノベーション研究」は、成功・発展するビジネスのイノベーションメカニズムの解明と未来戦略立案を目指し、この5月に茨城県・つくば市・株式会社常陽産業研究所等の後援を受けて設立された（事務局は筑波学院大学内、木下・松岡研究室）。

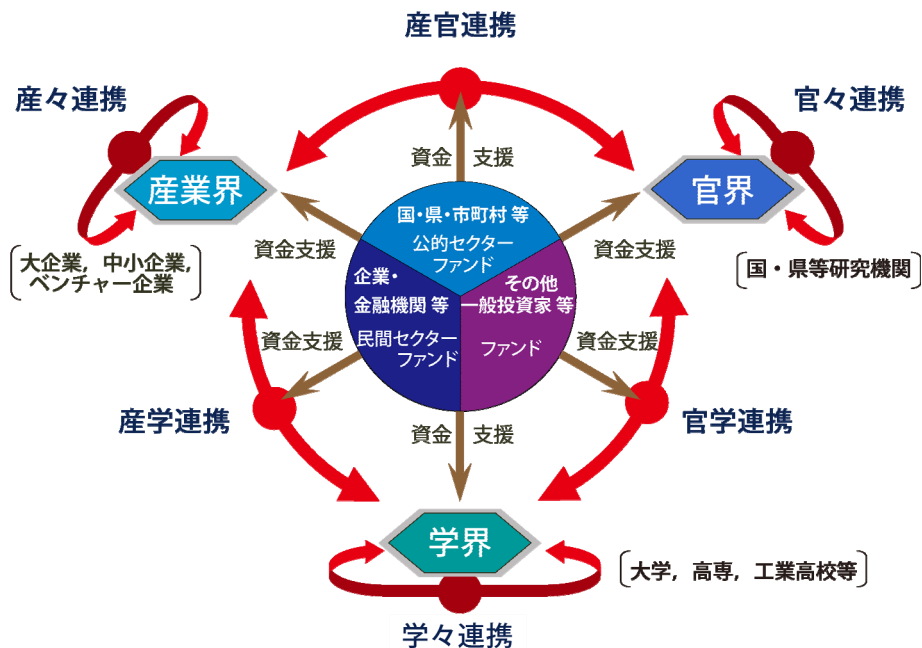


図1 「つくばイノベーション研究」の研究領域

*本発表の内容は著者らの個人的な見解であり、所属するそれぞれの機関の公式見解ではありません。

筑波研究学園都市が世界有数の学術・研究都市であることは確かであるが、新しく来たものにとっては、超え難い組織の壁を感じることも多く、効果的な情報の受発信が困難な面があった。そこで、我々なりに、1) 産学官連携における効果的ビジネス・マッチングの役割とあり方を探り、2) ケーススタディからイノベーションの成功要因の解明とビジネスモデルの展開可能性を追求し、3) 新たなビジネス・イノベーションの創出と事業化の方向性を検討する、コミュニティを立ち上げた。

3. 研究領域

「つくばイノベーション研究」の対象研究領域を図1に示す。図中に赤い太矢印で示された多様なビジネス・マッチングの中に成功するマッチングを見出すべく、活動や研究を重ねている。「産官連携」「官学連携」「産学連携」を軸に、「官々連携」「学々連携」「産々連携」をも扱う。

特に、本コミュニティは特定分野や地域にこだわることなく、参加する企業や人にとって、新たなイノベーション創出に向かってステップアップするためのプラットフォームの役割を果たすことも目指している（図2）。

4. 研究メンバー

「つくばイノベーション研究」は、ニーズとシーズのビ

ジネス・マッチングを目指しており、参加メンバーの属性、地域には全く制限がない。筑波学院大学のオープンカレッジとして開催される「講演会」（例会）、また、別途開催される「情報交換会」やネットコミュニティ（メーリングリスト、掲示板、SNS（Social Networking Service、準備中））参加者全員を「研究メンバー」（会員）と等しく位置付けている。

具体的な研究メンバー像としては、当初、産業界・官界・学界の研究者と知的財産担当者、投資家や公的セクター等資金支援グループ、ビジネス・マッチングの役割を担うコーディネータ、新規事業開発へ挑戦意欲のあるイノベータ等を想定していたが、さらにベンチャー企業家、県・市の産業政策担当者、大学院生など、実際の参加者は多岐に渡り、例会は盛況を極めている。

5. 活動内容

例会は、毎月第三水曜日に筑波学院大学にて開催し、ゲストスピーカによる「基調講演」と聴衆参加型の「パネルディスカッション」を実施している。基調講演には所属や分野を問わず多彩なスピーカを招聘し、内容もビジネスの成功・発展事例に特化している。

これまでに実施した基調講演と、今後予定している基調講演におけるゲストスピーカ及び講演タイトルの一覧を表1に示す。

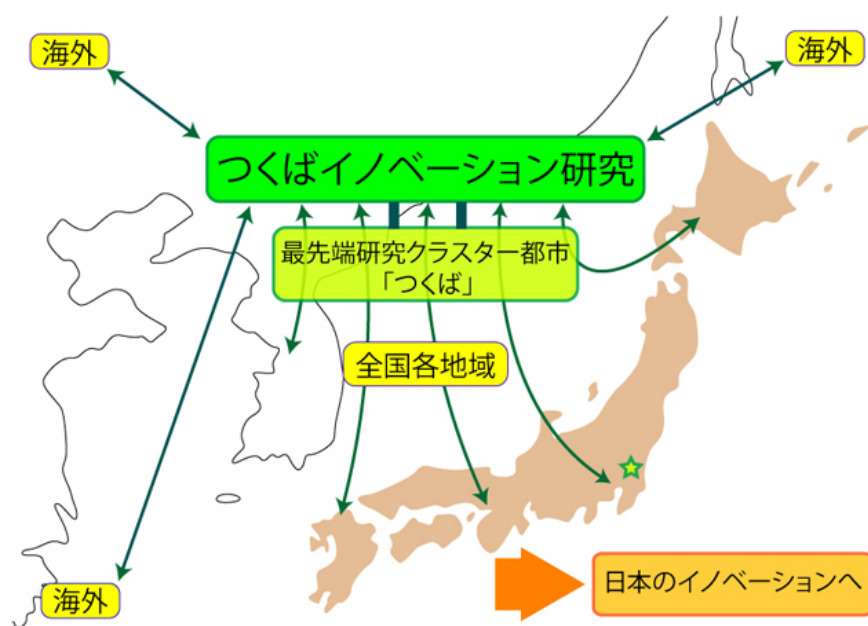


図2 「つくばイノベーション研究」の方向性と地域的拡がりの概念図

表 1 ゲストスピーカと講演タイトルの一覧(2008/9/8 現在)

第 1 回 2008/5/28	「ロボットでつくばを元気に」
	筑波大学システム情報工学研究科教授 (兼) 産学リエゾン共同研究センター長 油田 信一 氏
第 2 回 2008/6/18	「がんばれ日本の製造業ー日本の製造業は世界最強ー」
	政策研究大学院大学教授 橋本 久義 氏
第 3 回 2008/7/16	「苦悩する我が国のパイオベンチャーの活路はココだ」
	株式会社日経 BP 社医療局主任編集委員 宮田 満 氏
第 4 回 2008/9/17 (予定)	「技術ベンチャー成功の秘訣」
	イノベーションエンジン株式会社代表取締役 佐野 睦典 氏
第 5 回 2008/10/16 (予定)	「元気の出るものづくり戦略」
	財団法人常陽地域研究センター研究参与 久野 美和子 氏
第 6 回 2008/11/19 (予定)	「夢を形にー M&A と世界展開ー」
	協立電機株式会社取締役社長 西 雅寛 氏
第 7 回 2008/12/17 (予定)	「地域再生の切り札はニーズ志向型の産官学連携だ」
	茨城県工業技術センター長 藤沼 良夫 氏
第 8 回 2009/2/18 (予定)	「東大の産学連携とイノベーション」
	東京大学産学連携本部特任教授 堀 雅文 氏
第 9 回 2008/3/18 (予定)	「我が国の環境配慮型都市開発技術を世界へ」
	株式会社日建設計代表取締役副社長 安 昌寿 氏
第 10 回 2008/4/15 (予定)	「(講演タイトル未定)」
	株式会社ポッカコーポレーション代表取締役社長 堀 雅寿 氏
第 11 回 2008/5/20 (予定)	「(講演タイトル未定)」
	株式会社リコー執行役員法務・知財本部長 海老 豊 氏

また、講演後の質疑応答の場合は、徹底的な議論の出来る場とし、付随するパネルディスカッションでは、今後の展望や他分野との関連などについて議論を深めて建設的な結論を導き出し、参加者全員の声の中から「解決策」が得られるように配慮している。

参加者から寄せられる忌憚りの無いコメントは、様々な現場の生の声として重要であり、ビジネス・マッチングの具体化に関して欠くことのできない有用な情報をもたらしている。参加者からの率直な意見が出るように、後述する「情報交換会」またそれに引き続き会合を通じて、深い人間関係の絆を構築することに心を砕いている。

「情報交換会」は、通常は「講演会」の後に毎回開催している。ビジネス・マッチングの起点は「人」と「人」とのつながりであり、この「人」と「人」との無数の接点の中にビジネス・マッチングへと進化する種がやはりあり、具体的なビジネス・マッチングの創出には、この「情報交換会」が重要な役割を果たしている。

とりわけ、異なる業種や業界に所属するもの同士が互いに刺激しあう人的交流には、新たなビジネスの切り口が生まれる可能性が高い。運営側は常に新しい人がコミュニティに流入して来られるよう手立てを講じている。

ネットコミュニティには、会員に加え、ゲストスピーカやパネラーも登録しており、本コミュニティの重要な情報交換手段となっている。やはり、ネットの力は大きく、単に講演会の感想やコメント、また、参加企業の事業案内等に留まらず、将来役立つことやモノを参加者の「文殊の智慧」で生み出している。

リアルの世界での徹底的な「信頼」が、自由な意見や考え、独断と偏見、夢想幻想なんでも出し合い、マッシュアップを図っている。参加者が月に 1 回開催される例会が楽しみとなるように配慮している。

ウェブ上の掲示板方式のビジネス・マッチングコーナーでは、徹底的にユーザビリティとセキュリティに配慮している。厳格な入室制限とログ管理を実施し、保秘には細心の注意を払っている。ビジネスとは、旬モノがタイミング良く出会い、引き合い、コラボレーションを興すことであるとの認識に基づき、本コーナーを「旬(しゅん)」と名付けている。

なお、企業や研究機関がビジネス・パートナーを得るべく機密性の高い技術やノウハウの紹介を行う必要がある場合、掲示板という形式では不都合が生じる可能性があるため、会員と会員とをピンポイントで結ぶ新たな手段として SNS も導入した。

6. むすび

これまでの活動の軌跡を振り返って、まだまだ、得られた個々の知見から統一的な理論を導出するには至らないが、これまでに得られた諸点を纏めておく。

- 1) 垂直統合型の研究開発体制に加えて、オープンイノベーションが進展しており、研究開発が大学やベンチャー等の多様な主体によって担われている。
- 2) オープンイノベーションの進展により、学術論文の帰属とは別に、知財の権利関係の裁定・交渉が複雑化してきており、技術契約の専門家の育成も急務である（技術と経営と法律の分かる専門家が重要）。
- 3) オープンイノベーションの進展により、多様な主体による研究開発を戦略的にプロデュースするためには、知財プロデュース型のコーディネータの育成も効果的である（知的創造サイクルである、知財の「創造」「保護」「活用」の内、活用に長けた人材が少ない）。
- 4) 新たなビジネスチャンスは、幅広い連携先が必要と考えられがちだが、イノベーションの創出過程から、業種特性があり、医薬・バイオは比較的狭く、IT業界は比較的広い傾向がある。

5) 特に、連携推進にあたっては、「効果・効能の探索」「効能メカニズムの解明」に根拠を与える「アカデミック・マーケティング」の悪用に注意しなければならない。

6) オープンイノベーションのはじまりは、業務の外注のような発想ではなく、互いに他とは差別化できる優位な技術・発想を見せ合うことが重要であり、そのためにリアルに交流する機会が欠かせない。

参考文献

- [1] Chesbrough H. W. (2003), *Open Innovation*, Harvard Business School Press.
- [2] Christensen C., Raynor M.E. (2003), *The Innovator's Solution, Creating and Sustaining Successful Growth*, Harvard Business School Publishing.
- [3] Foster R. N., Kaplan S. (2001), *Creative Destruction - Why Companies That Are Built to Last Underperform the Market and How to Successfully Transform Them*, McKinsey and Co., Inc.

（問い合わせ先）

e-mail: info@tsukuba-society.org